

リーダーたちの本棚

Leaders as Reader

Vol. 133

L 高品質を追求し 驚きと感動を提供

【率いる】 Leading

1920年の創業以来、厨房機器、給湯機器、暖房機器、衣類乾燥機など、多様な商品を製造・販売するリンナイ。電気とガスを組み合わせて省エネ性能と快適な暮らしを両立するハイブリッド給湯・暖房システムや、浴室のヒートショック対策に役立つ浴室暖房乾燥機など、社会課題に貢献する商品の提案も多く行っている。内藤弘康社長は創業者の三男である故・内藤明人氏の娘婿。工学畑から同社に移った。

「入社は1983年、最初は営業担当でした。折しもガスコンロの変革期で、電子制御などの新機能に関するクレームが発生、営業もその対応に追われました。私はそのあと生産技術部に移りましたが、営業現場の危機感が開発部門に伝わっていないと感じました。そこでクレームのデータ化を推進。手間のかかることなので敬遠する販売店もあって苦労しましたが、根気よく説得してデータを積み重ね、それを開発部門にフィードバックする品質保証の体制を整えました。品質向上に欠かせないプロセスだったと思います」

社長就任は2005年。開発部門に「他社の後追いや安売りはやめ、品質・デザインともに練り上げた商品を」と呼びかけた。07年に販売を開始したビルトインコンロ「デリシア」は、品質に加えデザイン性の高さが評判となった。

「高付加価値商品に絞ることでブランドの存在価値が高まりました。『デリシア』は高価格ながら人気ブランドに育っています。私が常々社員に伝えているのは、商品すべてが驚きと感動を提供するものでなければならないということ。衣類乾燥機「乾太くん」や「マイクロバブルバスユニット」の近年のヒットはその成果と言えそうです」

ガス式のパワーが特長の「乾太くん」は、衣類乾燥やアイロンがけの時間短縮を望む共働き世帯を中心に支持され、業務用機は医療・介護施設や宿泊施設の需要が拡大している。新しい入浴体験を提供する「マイクロバブルバスユニット」の好調は、コロナ下の巣ごもり需要もあるようだ。

次の100年に向け、挑戦は続く

同社はアメリカ、中国、オーストラリア、韓国、インドネシア、ブラジル、イタリアなど世界各国で事業を展開。近年は特にアメリカと中国の売上げが好調だ。

「アメリカではコロナ禍の影響でセカンドハウスの購入や改装が増え、湯切れの心配がない瞬間湯沸かし器を備えたいというニーズが高まっています。中国では一日で数兆円の売上げがあるという大規模ネット通販の日『独身の日』に、当社の瞬間湯沸かし器がガス給湯器の売上額で1位となりました。販売台数は5番手でしたので、たとえ高額でも当社の商品が強く支持されていることがわかります」

今後はエネルギー消費削減などに貢献する環境対応商品の開発に一層注力していきたいと語る内藤社長。

「社員の自主性や創造性を尊重すると同時に、皆が同じ目標に向かっていくか、視線のベクトルが合っているかを常に意識しています。当社の思想の原点である「品質こそ我が命」を堅持し、次の100年に向けて挑戦し続けます」

朝日新聞社メディアビジネス局ウェブサイトでは、内藤弘康さんが語るリーダー論を紹介しています。
<https://adv.asahi.com/> 広告朝日

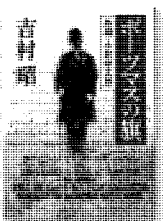


リンナイ 代表取締役社長

内藤弘康 さん

1955年兵庫県生まれ。79年東京大学工学部卒。同年日産自動車入社。83年4月リンナイ入社。98年取締役開発部長。2003年常務取締役経営企画部長兼総務部長。05年11月から現職。

内藤弘康さんのおすすめ本棚



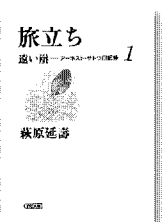
『ポーツマスの旗』 (新潮文庫) 吉村昭・著

ポーツマス会議に臨み、日露戦争の交渉妥結に命を燃焼させた小村寿太郎。しかし、樺太北部と賠償金の放棄は国民の憤激を呼び、大暴動へと発展する――。



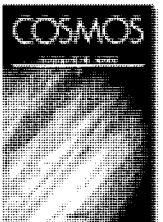
『一外交官の見た明治維新』 上・下巻 (岩波文庫) アーネスト・サトウ著 坂田精一・訳

風雲急をづける幕末・維新の政情の渦中で、生麦事件の血闘、事件や条約締結問題などの困難な紛争を身をもって体験したイギリスの青年外交官の回想録。



『遠い崖 アーネスト・サトウ日記抄』 全14巻 (朝日文庫) 萩原延壽・著

幕末から明治の日本に滞在したアーネスト・サトウの半生を追う。1976年から90年にかけて朝日新聞に連載された大作が文庫化。大佛次郎賞受賞作。



『コスモス』上・下巻 (朝日選書) カール・セーガン・著 木村繁・訳

宇宙や惑星の話から生命の起源や進化まで網羅した。累計116万部突破の名著を完全復刊。元宇宙飛行士・山崎直子さんの書き下ろしエッセイも収録。



『宇宙に「終わり」はあるのか 最新宇宙論が描く、誕生から「10の100乗年」後まで』 (講談社ブルーバックス) 吉田伸夫・著

宇宙は人類誕生までの138億年を序盤のごく一部として含み、この先「10の100乗年」に及ぶ未来を有する。未来の果てに宇宙は「終わり」を迎えるのか――。

手に汗握って読んだ 金子堅太郎の陰の働き

幕末から明治にかけての歴史小説をよく読みます。国を思い命をかけて困難と戦う人々の姿に胸打たれるのです。吉村昭の『ポーツマスの旗』は、日露戦争の講和条約がいかなる経緯で結ばれたかを丹念に描いています。本筋は日本の外相・小村寿太郎とロシアの政治家・ウイッテとの駆け引きですが、印象深かったのは、金子堅太郎の働きです。

若い頃に滞米経験があり、セオドア・ルーズベルト大統領と面識があった金子は、伊藤博文から「戦争が続けば勝つ見込みはない。アメリカの世論を親日に傾け、ルーズベルトに日本に有利な和平斡旋を促してほしい」と頼まれ、この難しい使命に挑みます。ルーズベルトは金子の肩を抱いて大統領室に招き入れたのですが、一方でロシアの同盟国のフランスやロシアと親しいドイツとも通じていて、ある時、日本に不利になる内容が記されたと疑われるドイツ皇帝の親書を受け取る裏ルートでこれを知っ

R 幕末・明治の人々の覚悟に感動

【読む】 Reading

ガスコンロや給湯器など熱エネルギー機器の開発・製造・販売会社として100年の伝統を持つリンナイ。名古屋を拠点に世界各地で事業を展開している。内藤弘康社長は「驚きと感動の提供」を社員に働きかけ、製品開発をけん引してきた。趣味は読書。「感動した本は人に伝えたくくなります。その一部をお話ししましょう」

た金子は「親書は受け取っていない」と言い張るルーズベルトに切々と日本の立場を訴え、親書の極秘内容を明かしてももらい……。こうしたやり取りを現場に居合わせたかのような緊迫感で伝えてくれるのが吉村作品の魅力。他にもたくさん読んでいます。日露関係の作品では「大黒屋光太夫」(新潮文庫)も秀作だと思っています。

小説以外で読み応えがあった幕末・明治ものは、英国外交官アーネスト・サトウの記録『一外交官の見た明治維新』は、若きサトウが生麦事件や薩英戦争などに次々と遭遇し、日英交渉を通じて日本の要人たちと出会っていく様子を記しています。幕府側にも倒幕側にも寄らない第三者的な視点が貴重だと思えます。旅好きなサトウの目を通して当時の日本の風景や庶民の営みをうかがい知ることもできました。

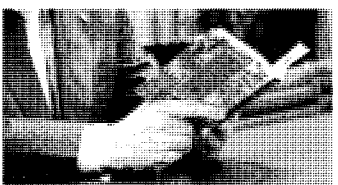
宇宙の本を読むと 悩みを忘れて前向きに

私は歴史の他に科学、特に宇宙が好きで、カール・セーガンの名著『コスモス』に影響を受けました。地球や生命の起源、宇宙科学や惑星探査の歴史など幅広いテーマを扱っており、学問分野も多岐にわたります。著者は天文学者ですが、文章は叙情的でロマンにあふれ、難しい理論もわかりやすく紐解いています。2002年に小柴昌俊先生が

ニュートリノの観測成功でノーベル賞を受賞した時は、本書を読み返して興奮を新たにしました。「太陽を1秒間見つめると、10億個ものニュートリノが地球を通過する。それらは光子のように網膜のところで止まったりはしない。それらは、何ものにも邪魔されず、後頭部を突き抜けてゆく」。なるほど、こういうものをカミオカンデでキャッチしたのかと。

宇宙の解明は日進月歩。その知識のアップデートも読書の楽しみです。最近「宇宙に「終わり」はあるのか 最新宇宙論が描く、誕生から「10の100乗年」後まで」(講談社ブルーバックス)を、10の100乗年を365日に置き換えると、ビッグバンから現在に至る138億年は、大晦日どころか、元日の午前0時0分00.000...004秒頃だそう。宇宙の寿命に対して138億年は瞬きのような一瞬だということです。10の100乗年の宇宙に比べれば、自分なんてちっぽけなもの。そう考えると、悩みがあっても大したことはない前向きになれる。宇宙の本にはそんな効用もある気がします。

私の趣味は、読書ともう一つ、本に出たきた場所を旅すること。史跡を訪ねたり、共感した人物の墓参りをしたり。ご子孫が墓前に花を手向けているところに出くわし、言葉を交わしたことも。そうした旅を重ねるほど、歴史は今に生きていると実感します。コロナ下では旅もままなりません。今はグーグルマップという便利なツールがあるので(笑)、本を傍らに置いてあちこち旅しています。(談)



ニュートリノの観測成功でノーベル賞を受賞した時は、本書を読み返して興奮を新たにしました。「太陽を1秒間見つめると、10億個ものニュートリノが地球を通過する。それらは光子の